第９回国際日本文学研究集会公開講演（1985. 11. 9）

ロマンとしての落窪物語

The *Ochikubo monogatari* as a novel

Frits Vos*

The contents of the *Ochikubo monogatari* (late 10th century) have often been related to folk tales of the Cinderella type. The oldest story of this type in the Far East is included in the sequel (*hsü-chi)* to the Y*u-yang tsa-tsu,* compiled by Tuan Ch'eng-shih (d.863). Its heroine is Yeh-hsien, who is badly treated by her stepmother but eventually marries the ruler of an island kingdom. The story probably originated in Vietnam or Southern Kwangsi. In modern Vietnam we find a folk tale called *Tâm Cám,* an obvious 'descendant' of the Yeh-hsien story. Tâm and Cám are the daughters of different mothers. Their father is dead and so is the mother of Tâm. Tâm is treated cruelly by her stepmother and stepsister, but again there is a happy ending: Tâm becomes queen, and her stepmother and Cám are severely punished. In Korea the Cinderella motif is most strikingly represented by the *K'ongjwi P'atchwi* tale.

In this paper, the Cheju-do version of the tale has been summarized. Here the stepdaughter eventually becomes the consort of

* 国文学研究資料館客員教授、ライデン大学名誉教授

the Son of Heaven. In Japan we find a great many Cinderella-type stories. A résumé of the *Awabuku Komebuku* tale from Northern Honshū has been included.

The typical Cinderella type of folk tale—in the Far East as well as in Europe—has a fixed order of features. The stepmother is always a second wife. She has a daughter of her own whom she treats very nicely. The father of the stepdaughter is either dead or has a weak character. Before the stepdaughter is allowed to attend a festival she has to perform nearly impossible tasks. In fulfilling them she is usually helped by birds. Having accomplished her work she puts on finery, obtained from a supernatural being (in Vietnam and South China from the buried remains of a fish; in that case she follows instructions of a Buddha, Kuan-yin or an immortal). Then she goes to the festivities. After a test (ususally consisting of trying on very small shoes) she marries a king, a prince, scholar or rich man. The stepmother and her daughter are severely punished.

The speaker points out that a comparison of the *Ochikubo monogatari* to the Far Eastern Cinderella tales seems attractive, but is actually far-fetched. In every history of Japanese literature the realism of the *Ochikubo monogatari* is stressed as one of its characteristics. The unlimited fantasy, the curious jumble of reality and the supernatural and the inapplicability of natural law which are typical of fairy tales, are completely absent in this *monogatari*. In the speaker's opinion, the author has simply been inspired by existing conditions in 10th century Japan, where polygamy—at least in the higher strata of society—was the rule

rather than an exception.

A definition of the concept 'novel', *roman,* is given, and it is demonstrated that the contents of the *Ochikubo monogatari* satisfy the standards required of this literary genre.

A survey of several classical works, usually called 'novels', in the Far East, Europe and India follows. It is shown that in several countries (China, Korea and the European countries) the novel appears much later in history than in Japan, and that in other countries (ancient Greece, the Roman Empire, India and Vietnam) we can only speak of a so-called novel.

The *Utsuho monogatari,* another work of the late 10th century and considered by every specialist to be of a somewhat earlier date than the *Ochikubo monogatari*, may not be considered as a novel in the true sense of the word, since the contents of the first of its 20 scrolls are in the nature of a fairy tale.

Because of its structure and contents the *Ochikubo monogatari* occupies a unique place in world literature, in other words: Japan was the first country to produce a novel.

欧米の東洋学者の使命の一つは、各自の国語圏内で、東洋文化の知識の普及につとめることにありますので、本日の私は実に困った立場に立たされています。国文学に造詣深い学者の集りで、日本文学について、私のつたない日本語でお話することは、何もないように思えます。それでもなお、たって発言させていただくのは、危ない橋をこわごわ渡って、一刻も早く向こう岸に着きたいと願う心理が働いているからです。落窪物語についての私の二、三の所見を述べさせていただくにあたり、西洋的見地というただし書きを真正面に掲げることを御容赦ください。

落窪物語に踏み込んでまず気付くのは、伊勢物語、枕草子、源氏物語などの平安文学傑作に比べて、何となく継子扱いを受けてきた作品であるという印象を受けることです。6年前有精堂が出版した平安朝物語の第三巻は、落窪物語についての著名な学者の7つの論文と、明治32年から昭和54年迄に発表された研究参考文献目録を含んでいます。源氏物語の諸版、注釈本、論文、翻訳、参考書名の総目録だけで優に一冊の本ができるのに対して、このリストはただの4頁余りでしかないのです。西欧で出版された日本文学史の中で、落窪物語に適当なスペースをさいているのは、明治時代のフローレンツ（Karl Florenz）のものだけです。翻訳本としては、ただ一冊、1934年に柳沢栄三の援助を得てウイルフリド・ホワイトハウスが訳した「落窪物語、10世紀の日本小説、落窪姫の物語」（Wilfrid Whitehouse, *Ochikubo Monogatari or The Tale of Lady Ochikubo: A Tenth Century Japanese Novel*, Japan: J. L. Thompson & Co., Ltd., London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., 1934）があるだけです。

昨年シモネ・モウクレールの「説話からロマンへ＝10世紀の日本シンデレラ物語である落窪物語」（Simone Mauclaire, *Du conte au roman: Un "Cendrillon" japonais du Xe siècle*－L'Ochikubo monogatari, Paris: Éditions Maisonneuve et Larose, 1984）と題された、社会学、民俗学的研究書が出版されました。この秀れた研究書についてはあとで触れますが、引用文を多量に扱っていても全訳書ではありません。

私は今日、落窪物語の諸本、著者、成立年代、その影響、影響を受けた文学などにわたってお話するつもりは一切ありません。著者は不明、成立年代は10世紀末とだけ、という紹介で十分だと思います。

落窪物語の内容に精通されている御在席の先生方には、はなはだ心苦しいのですが、演題を進行させる上に、また物語中のでき事や登場人物をあとで引用する便誼のために、手短に粗筋をお話しいたします。

皇室の血筋をひく女主人公の女君は中納言の娘です。幼時に母を失い、父、

継母の北の方、４人の義理の姉妹と３人の義理の兄弟と住んでいました。北の方は継子を窪のような一間に押し込めて、邪慳に扱っていました。女君はそれで落窪の君と呼ばれていました。召使いの阿漕とその愛人惟成は不幸せな落窪の君の陰になり日向になり、力になっていました。

中納言一家が石山寺参詣に出払い、家に残った落窪のところに、惟成の手引きで、右近の少将道頼が三夜にわたって訪れました。北の方は、好色で貧しい叔父の典薬助老人に落窪を娶せようと図りますが、成功しません。一家が加茂祭りにでかけた折に、道頼は落窪の君を奪い出して駆け落ちしました。

北の方は四番目の娘、四の君と道頼の婚姻を企てたので、道頼はいとこの兵部の少輔を替え玉にしました。かれは色白で馬面なので、面白の駒とあだ名される頭の鈍い男でした。三の君の夫の蔵人の少将はこの義弟に愛想を尽かして、妻に通う足も遠のき、道頼の妹に近づきます。中納言一家への復讐心に燃える道頼はこの結びつきをそそのかし、更に車争いなどをして一家を侮辱します。その間道頼は中将、中納言に昇進し、落窪の君は二人の男児をもうけます。

落窪はもう死んだものと考えた中納言夫婦は、彼女が死んだ母から相続した邸を手入れして、引越そうと準備していました。落窪の君は邸の地券の所有者なので、道頼一家が一日先に移り込みました。中納言は大損をした上に、世間の笑い者になりました。話し合いのために道頼を訪れた中納言は四年ぶりに落窪の君に対面し、過去の仕打ちを深く詫び、和解しました。

初めはそんな夫を責めた北の方もやがて継子と文通するほど態度を柔げます。道頼は自分の報復行為の埋め合わせにつとめ、中納言の70才の誕生日には盛大な賀宴をはります。このとき、落窪の君は北の方に再会します。

惟成は三河守に任ぜられ、阿漕は同行します。道頼は中納言に大納言の称号を得る努力をし、落窪は父の寝殿を相続します。彼女は継母の面倒を見、義きょうだいの立身出世と幸せのために尽力しました。道頼は太政大臣になって、すべてが、めでたし、めでたし、で物語は終ります。

ではここで三つの点に留意していただきます。まず第一に、北の方は落窪の君に感謝の言葉を述べています。

「人は自分の生んだ子よりも継子のおかげを受けるものですねー。私の生んだ子は7人ありますけれど、このように細かに心を配って、世話してくれる者があろうか。」死の前にも言っています。「世間の人びとよ、継子を憎みなさるな、継子というものは、まあ、ありがたいものでありますよ。」（三谷栄一の現代語訳）

第二は、北の方の死後、太政大臣は盛大な葬儀を行いました。

第三は、物語の結びに、極端に非現実的な表現が出てきます。「『阿漕は二百才まで生きおったよと、まあ世間で言っておりましたよ。』

私は頻繁に論じられているシンデレラ・タイプの昔話と落窪物語の比較研究についてお話するつもりではありませんでしたが、この物語の性質についての私の考察を裏付けるために、どうしてもこのテーマに触れなくてはなりません。ヨーロッパのシンデレラ・ストーリーが何時頃発祥したかを確かめるのは、不可能に近い仕事ですが、少くとも、この主題は1697年にシャルル・ペロー（Charles Perrault）（1628-1703）に編集された「ガチョウのおばさんの話（Les contes de ma mère l'oye）」に現れています。そして115年後、グリム兄弟の「子供と家庭の童話（Kinder- und Hausmärchen）」（1812-1815）には、筋の通った話になって出現しています。これらの童話は日本でもよく知られているので、私はあまりよく知られていないと思われる、東洋、すなわち、中国、ベトナム、朝鮮、日本におけるこのテーマについて調べてみました。東洋で最も古いと考えられるシンデレラ・タイプ物語は西暦863年に没した段成式編の酉陽雑俎に現れています。続集巻一の中の三番目の話です。

「南方の人びとは、代々、次のような話を語り伝えてきた。秦と漢時代のそのまた昔に、呉氏の人で洞窟の首領がいた。地元の人は彼を呉洞と呼んでいた。二人の妻を持っていたが、その一人は葉限という女の子を残して世を去った。娘は幼ない時から従順で、また金細工が巧みだった。父はこの娘を

愛したが、一年後に死亡した。葉限は継母にむごく扱われ、木を切ったり、深い井戸の水を汲む仕事を言い付けられた。ある日、葉限は赤い鰭と金色の眼を持った二寸ばかりの魚を捕まえた。彼女は魚を家に持って帰り、小鉢に入れた。魚は日毎に大きくなったので、つぎつぎに大きな器に移さなければならなかった。そのうちに魚はどんな入れ物にも入らないほど大きくなったので、葉限は家の裏の池に放して、食物の残りを餌にして与えていた。彼女が池に近づくと、魚は必ず池の淵に頭を出し、他の人間が来ると、水底に潜った。継母はそれに感付き、池のほとりでひそかに待ち伏せたが、魚はとうとう出て来なかった。彼女は策略をめぐらして、葉限に言った。『お疲れさん。お前に新しい上着をあげよう』そして新しい上着に着換えさせ、何百里も離れた井戸に行って水を汲んでくるように命じた。それから継母は葉限の上着を着込んで、鋭いナイフを袖にかくして、池に行き魚を呼んだ。魚が水面に頭を出した時、彼女は魚の頭を切り落して、一丈余りに成長していた魚の肉を家に持って帰った。継母は普通の魚よりは何倍もおいしい肉を舌鼓を打って食べてしまい、残った骨を積んだ肥やしの下に埋めた。

翌日葉限は池に行って、もう魚がいなくなっているのに気付いた。野辺で泣いていると、突然空から、襤褸をまとって、長髪を肩に垂らした男が降りてきた。彼は葉限を慰めて言った。『泣くのはおよし、お前の継母は魚を殺して食べてしまったんだ。骨は肥やしの下に埋まっている。家に帰って、骨を掘り出したら、自分の室にかくしておきなさい。お前が骨に祈ったら、願いごとはすべて叶うようになるから』。葉限はその言葉に従ったので、金や真珠や美しい着物、おいしい食物を望むだけ得ることができた。洞窟祭の日に、継母は葉限が留守をして、庭の果物の木を見張るように言い付けた。継母が出かけてしまうと、葉限は緑色の衣裳を着て、金色の靴をはき、祭りに出かけた。継母の実の娘は人込みの中に葉限を見付けて、母に告げた。『あの娘は私の姉さんによく似ているわ』。継母も不審げな視線を投げたので、葉限は逃げ帰った。途中で片方の靴が脱げ、洞窟の住民の手に落ちた。継母

が帰宅した時には、葉限は両腕で庭の木の幹を抱きかかえて眠っていたので、疑いはすっかり晴れた。

洞窟からあまり遠くないところに、陀汗王国という島国があった。強力な軍隊を備え、王は数十の島とその海域を統治していた。洞窟人は葉限の金色の靴を陀汗国に売ったので、それは王の手に渡った。王は左右に侍っている女たちにその靴をはいてみるように命じたが、一番小さな足を持っている者でさえ小さすぎてはけなかった。それで、王は国中の女が試してみるように命じたが、はける者は一人もいなかった。その靴は石の上を歩いても音を立てないであろうほど、羽のように軽やかだった。靴を売った者は疑わしい手段で手に入れたに違いないと、王は考えた。その男を捕え、拷問にかけたが、靴の出所はやっぱり分らなかった。靴は路傍に置かれて、全国軒並に家宅捜査が行われた。もう一方の靴をはいている娘がいたら、直ちに王に報告されることになった。その頃葉限の家も調べられていて、彼女には両方の靴がぴたりと合った。緑の服に、金の靴をはいた葉限は天人のように美しかった。この事は直ちに王に報告され、葉限は魚の骨を持って陀汗国に赴いた。やがて葉限の継母と異母妹は飛石で殺されたので、洞窟人は憐れに思い、石坑に葬った。その墓碑は懊女塚と呼ばれるようになった。洞窟人がこの塚に良妻を得たいと祈ると、その願いが叶えられるので、人びとから崇められるようになった。

陀汗王は葉限を上婦（ナンバーワンの妻）にした。結婚した当初はあまり豊かではなかったので、魚の骨に無限の財宝を願ったが、希望は叶わなかった。王は魚の骨を百斛の真珠や金と交ぜて海岸に埋めた。兵隊が謀叛を起した時に、王は海岸に埋めた宝物を掘り起し、軍隊を再編成しようと図ったが、宝物すべては一夕の海潮に流されてしまっていた。

この話は私の実家の年老いた召使いの李士元が語ってくれたものである。士元は邕州の洞窟の出身で、南方の数多くの怪事を覚えていた。」

私はこの葉限の物語りは広西かベトナムに起原しているのではないかと思

います。ベトナムには今でもTâm Cám（トム・カム）という民話が残っています。類話は多種ありますが、Du'o'ng Dinh Khuêが記録した話の粗筋は次のようなものです。

「トムとカムは異なった母を持った姉妹だったが、二人の父はとうに亡くなり、トムの母も世を去っていた。

ある日カムの母は娘たちに蝦をとってくるように言い付けた。怠け者のカムが木陰で休んでいる間に、トムは勤勉に蝦を捕えていたが、籠が一杯になったので、海辺で髪を洗った。その時カムはトム籠の中味をこっそり自分の籠の中に移して、家に帰った。トムが途方に暮れて泣いていると、佛陀が現れ（他の通説では観音）、籠の中に小魚が一匹入っていることを教えて、『家に持って帰り、三杯の御飯を二杯にしても、この魚を飼いなさい。』と言った。トムは佛陀の言葉に従ったので、魚は大きくなった。すると継母とカムはその魚を殺して食べてしまった。トムがまた泣いていると、再び佛陀が現れ、魚の骨を見つけてきて、寝台の足の下の四つの壺の中に埋めるように、と言った。トムは雄鶏に助けられて魚の骨を探し出すことができた。それからしばらくして、国王は女王にふさわしい花嫁を見つけるために大宴会を催した。継母とカムはもちろん出席するが、トムは混じった米と胡麻が入った大きな籠を渡され、米と胡麻を別べつに分け終ったら、宴会に出てもよいと継母に言いつかった。鳩が米と胡麻を分ける作業を手伝った。佛陀が現れて、トムに魚の骨を取り出すように命じた。骨は美しい衣裳や装飾品、ダイヤモンドで飾られたサンダルに変った。トムが会を抜け出て、家路につく時、片方のサンダルが脱げ、それが国王に拾われた。彼はサンダルの持ち主を探すために、宦官に国中の家を調べさせた。トムはもちろん女王になり、めでたし、めでたしで、話は終る。」

これがあらましの筋ですが、ハッピーエンドのあとでもいろいろなでき事が起きます。トムの仕返しは非常に残酷です。カムは熱湯の中で煮られて、細切れにされて、壺に入れられ、継母に送られました。継母は食事毎に壺の

中の肉をおいしく味わいました。壺の中味が底についた時、カムの頭が出てきました。母親はショックで死んでしまいます。この話で吐き気をもよおされた方にはお気の毒ですが、実はグリム兄弟も気持ちの悪い話をシンデレラの中に記録しています。シンデレラ物語の継母の実の娘はプリンスの見付けた靴をはいてみますが小さすぎました。母親は『一旦女王になったら、歩く必要もないから、親指とかかとを切り取っておしまいよ。』と言います。姉娘は親指、妹娘はかかとを切り落してしまわなければなりませんでした。シンデレラの結婚式の当日、義理の姉妹は御機嫌買いのためにでかけますが、教会に向かう途中、シンデレラを助けた二匹の白鳩が飛んできて、娘たちの片方の眼を突っつき、帰りの道ではもう一方の目を突っつきました。姉妹は盲目になって、みじめな残りの人生を暮らさなければなりませんでした。

ここでベトナムから朝鮮に移動します。シンデレラのテーマはK'ongjwi P'atchwi (コンジュイ・パッジュイ) の伝説に代表されています。済州島に伝わっている類話を選びます。

「昔夫婦と一人の娘が暮らしていました。ある年、妻は病いを患って亡くなりました。夫は新しい妻を迎えました。彼女は先妻の娘を憎みました。そのうちに自分の娘が生まれました。異なった母から生まれた二人の娘たちは同じ家に住んでいましたが、彼女たちの生活には雲泥の差がありました。姉のコンジュイは大豆のひき汁で作った粥、妹のパッジュイは小豆のひき汁で作った粥を貰いました。K'ongは大豆で、P'atは小豆ですから、名前もそう呼ばれるようになりました。コンジュイは美しい娘に成長し、パッジュイはあわれな醜い顔を持っていました。時の経つのは早いもので、姉妹は年頃の娘になっていました。

ある日靈登儀式があって、パッジュイは母と連れ立って祭典にでかけましたが、コンジュイはまず三つのむつかしい仕事をしてしまわなければなりませんでした。彼女は烏や雀、一頭の牛に助けられて仕事を片付けました。靈登堂に行く途中、天子が靴を一足持って、道傍に立っていました。その靴に

足が合う娘を探していたのです。もちろんコンジュイだけがはける靴ですから、全く彼女の足にぴったりです。その靴をはいて祭典にでかけましたが、継母はどうやってそんなに早く仕事が片付けられたのかと尋ねます。そしてコンジュイの靴を脱がせて、パッジュイに無理にはかせました。祭りの終りに、天子は自分の花嫁を呼び出すと、パッジュイが出頭しましたが、直ぐに化けの皮がはげました。天子は官家に通告し、継母は遠国に追放され、コンジュイは幸せな結婚をして、ハッピーエンドになりました。」

ベトナムと朝鮮の話の女主人公たちの名前に共通点が見出されます。コンは大豆でパッは小豆ですが、トムは砕け米でカムは糠です。日本でも対照的な意味を持つ一対の名前を使うことがあります。米福粟福、紅皿欠皿などです。米福粟福は代表的な継子話で、糠福米福とか継子の栗拾いという別名で全国的に分布されている昔話です。

昭和52年以降に発行された日本昔話通観にいくつかの類話がのっています、本州北部に伝わっている米福粟福をかいつまんで、私流にお話します。

「昔、米福粟福と呼ばれる異母姉妹が住んでいました。粟福の生みの母はとうの昔に亡くなって、父は第二の妻を娶り、米福が生まれたのでした。粟福は控え目な、気だての良い娘でしたが、米福はひねくれて、妬み深い娘でした。秋のある日、母は娘たちに栗を拾ってくるように言い付けました。粟福は年上なので先に立って行かなければなりませんでした。粟福が渡された籠には穴があいていたので拾った栗はみんな落ちてしまいます。後から来た米福は新しい立派な籠を渡されたので、粟福が落した栗を集めるだけでよいのでした。急に強い風が吹いてきて、霰のように栗が降りました。姉妹は転がる栗を追って行くと、洞穴にやってきました。そこには山姥が住んでいて、娘たちに髪の中の虱を取ってくれと頼みました。粟福は一心に虱を取りますが、米福はいやがって、のろのろと手を動かしました。虱がみんな取れた時、山姥は二人の望むだけの栗と、粟福に新しい籠をくれました。それから蓋の付いた大きさの違う籠を持ってきて、どちらが欲しいかと尋ねました。米福

は『米粒は粟粒より大きいから、大きい方がいい。』と答えました。山姥は、家に帰るまで蓋を開けてはいけない、と言いましたが、米福は待ちきれずに、途中で籠の蓋を開けてしまいました。中には牛の骨や糞などの汚物が詰まっていました。粟福の籠の中には、美しい着物、帯など良いものが一杯入っていました。彼女はその籠を継母の目の届かない場所にかくしました。暫くして、村の鎮守でお祭りがありました。継母と米福がでかけた後、粟福はいろいろなむつかしい仕事をするように命じられていました。村の娘たちや、鳩や雀がそれを助けてくれた上に、靈魂の力も手伝ってくれたので、早く仕遂げることができました。粟福は山姥に貰った着物を着て祭りにでかけました。米福はそれに気付き、母に告げました。継母は『たくさん仕事を言い付けておいたから、来れる筈はないよ。他人の空似だろう。』と答えました。祭りが終る前に粟福は家に帰り、汚い着物に着換えました。その時突然、その地方一の長者の使いが現れて、長者が粟福を妻にしたいと希望する旨を伝えに来ました。継母は米福を行かせようとしましたが、長者自ら出かけて来て、どうしても粟福でなくてはならないと言い渡しました。そして粟福にすばらしい嫁入道具一切と美しい馬具で飾られた馬一頭を贈りました。彼女はその馬に乗って輿入れをしました。」

替え話の多くは、継母と米福をひどく懲らしめています。川に落として溺死させたり、泥沼に落として蛞蝓にさせたり、身の毛のよだつような虫に変形させたりしています。

ここまでお話した継子物語から、次の結論が出てきます。

シンデレラ・タイプの昔話には共通点が見られる。継母は父親の第二の妻である。継母には実の娘があり、その子には甘い母である。継子の父はすでに死亡しているか、骨無し男であること。祭りかパーテーの前に継子はむつかしい仕事を言い付けられ、それを済まさなければ出かけられないこと。普通は動物が助けてくれること。仕事が片付くと、継子は神格化された人物か仙人に貰った美しい衣裳を着ること、などです。中国やベトナムの話では、

魔力を持つ者が魚の骨になっていますが、この場合は佛陀、観音、または仙人が姿を現します。祭りで、いわゆる花嫁試験に合格すると、プリンス、学者、金持ちとの結婚が実現します。継母と実の娘は重い懲罰を受けることも共通しています。シンデレラ・タイプの昔話以外で、ヨーロッパにも東洋にも存在していて、興味深いのは羽衣伝説のタイプです。

さて、東洋のシンデレラ・タイプの主題が、私の仮定するように、越（ヴィエット）族に起原して、中国本土から朝鮮半島や日本に伝わったとすると、それぞれの地域で、その土地柄に適応した脚色がほどこされたのが分ります。たとえば、早く大きくなる魚は朝鮮や日本の話には現れません。小さな靴は日本にはほとんど見当りません。いつ頃酉陽雑俎が日本に伝わったか、また落窪物語の作者が果して葉限の話の存在を知っていたかどうかは不明です。日本の米福粟福のテーマがどんなに古いかも分りません。しかし、落窪物語とシンデレラ・タイプの昔話の関連性について検討する試みはありました。この講演の初めに触れたシモネ・モウクレールは、著書の第一章を口碑文学と落窪物語の仮定的関係の問題点に注いでいます。関敬吾の「婚姻譚としての住吉物語」と題する論文に倣って、モウクレールは（住吉物語を含む）中世の説話と現代の米福粟福と落窪物語の主題比較表を作成しています。落窪物語の16の要素のうち、米福粟福からの9点に対応共通点があるとしています。最も重要な三つの例を引用します。

米福粟福	落窪物語
1．継母と実の娘は祭に行くが、粟福は家に残ってむつかしい仕事をする。	中納言一家は石山寺詣でに出かけるが、落窪の君は家に残って裁縫をする。

2．鳥や女友達が来て、粟福の仕事を手伝う。仕事が済むと山姥から貰ったきれいな着物をきる。	惟成はひそかに中納言の寝殿に道頼を連れて行き、阿漕は自分の新調の着物を落窪に与え、几張と夜具を叔母から借り、道頼を迎えるにふさわしいように支度する。
3．継母は長者の嫁として、米福を代りに立てようとする。	北の方は四の君を道頼に結婚させようと図る。

(Mauclaire, op cit.,pp. 32-34)

この比較は一見すると説得力があるようですが、よく検討してみると不満足な点が目立ってきます。仕事を済ますと、粟福は祭りに行って、長者の注意を魅きますが、落窪の君は仕事も仕上げずに、石山寺にも参詣せず、道頼の方が訪れてきています。

米福の母は長者が粟福に目を付けたことを知っていますが、北の方は道頼と落窪の仲を感知していません。大きな違いは、北の方は何度となく道頼に侮辱されるが、最後には落窪の君とも、道頼とも和解して、温かく二人に遇されるようになる。果して落窪物語の作者は仮定の昔話の示唆を受ける必要があったのであろうか、と私は疑います。

物語の筋は10世紀の一夫多妻制社会の情況を単に描写しただけでもかまわないわけです。落窪物語の特色は元来その写実性にあると強調されてきています。昔話特有な、際限のない幻想、現実と夢の奇妙な組合せ、超現実的な不自然さが、落窪物語には全然欠けています。落窪物語をロマンと呼ぶのは私が初めてではありません。しかし私の知る限りでは、ーもちろん、私の知っている限界もしれたものでしょうがー今まで落窪物語をロマンとみなす妥当性を検討した者はありませんでした。

フランス語のロマンは「ラテン語からロマンス語に翻訳された本」を意味し、中世紀になって、「フランス語で書かれた本」を指すようになりました。

14世紀には、ロマンは

「冒険談を物語る詩」、16世紀には、「散文体で書かれた騎士道の物語」、17世紀になって、現代用いられている意味になりました。私が本日用いるロマンの語義は、現代私たちが通常使う意味合いであることはもうお察しいただいていると思いますが、この語の概念をもう少しはっきりと定義づけましょう。ロマンは人間が経験する珍しいでき事を取り扱った、比較的長い、散文で書かれた作品です。物語中の人間の行動は「作り事」で、作者の想像力に依っています。これはいわゆる歴史小説と呼ばれる作品にも適用します。この場合でも、作者の空想力が果す役をないがしろにすることができないからです。ロマンを語っていく話法が根底です。次に何が起きるかに好奇心を引っ張っていかなければなりません。同時に、話の筋(プロット)も重要性を持っています。話はでき事や行動の順序を語ってくれますが、筋(プロット)はなぜその出来事が起き、その行動がとられたかを説いてくれます。普通は過去時制で書かれています。必ずしもでき事が過去の事ではなくてもよいのですが、そのでき事が虚構であるのを強調するためです。時の流れもまた大切な要素です。たとえば、ジェームス・ジョイスの長いロマン「ユリシース」は24時間の時の経過を語っていますが、ただ一行で十年間について表現したり、また何世代ものでき事を一口でまとめている時もあります。さらに、でき事を年代順に従って語っているロマンはたいへん少いのです。ロマン中の人物に、人間として、著者が好意を感じているのが普通です。著者が創作した人物ですから、読者は必ずしも、いつでも好意が持てるわけではありません。しかしまた、読者は人物の中に自己発見をすることもあります。E. M. フォースター(Forster)はラウンド・キャラクター円球人物とフラット・キャラクター扁平人物に大別しています。扁平人物は類型的で、「タイプ」という語にぴったりする人物で、常に不易不変の特徴を備え、人格に発展性がなく、個性と心理的複雑性に欠けています。このタイプは社会的階級や人間性の善悪などのある一定の概念を代表しています。たとえば、優しい母親、勤勉なサラリーマン、不

貞な妻を持つ夫、吝嗇で冷酷な男、等々です。それに対して、円球人物はすべての点で正反対です。

フォースターはディケンズの世界の人物の大半は扁平人物だ、と言っています。「ディヴィッド・コパフィールドは円球になろうとしていますが、それも遠慮がちです。たいていの人物は単なる一行の文章で要約されているのにもかかわらず、そこには人間性の深さに対するすばらしい感動をよびおこすものがある。」

満足とはいかないまでも、以上の定義はロマンの本質的性格を位置づけたと思います。もちろん20世紀後半に入ってから、新しい小説技法としてセンシビリティーという必要条件が求められるようになったのは確かです。ヌーボー・ロマンのような動きは、従来までの小説の要件である性格描写、直線的話法、押しつけがましい政治社会的内容を拒否する傾きがありますが、これらは小説家の新しい技法への模索であって、やがてまた更に新しい理論にとって代わられることでしょう。ですからこのような現象は前述のロマンの定義を真に傷つけるものではありません。

初めにお話した落窪物語の粗筋を思いだしていただくと、この物語はロマンとしての要件の大半を満たしていることが明らかになります。作者自身が生きた社会でのでき事と、とられた行動が一貫して過去時制で書かれています。全登場人物のほとんどが扁平人物です。この中で際立って例外なのは北の方です。最初は典型的な継母タイプですが、あとで一種の心理的発展を見せています。典薬助や面白の駒は扁平人物どころか、戯画的、漫画的人物と言えましょう。彼らの登場こそ、この物語が持つユーモア的一面を豊かにしています。

ここで諸国の散文文学、殊にロマンの発展について簡単に検討してみましょう。

中国の伝記小説の発展は西暦700年前後に張鷟の遊仙窟で絶頂に達した感があります。御存知のように、この作品は万葉集、伊勢物語、その他の作品

に多大の影響を与えました。遊仙窟は一万語以上の長さで、伝記小説の中では最も長く、興味ある作品です。恋愛が主題になっていますが、全然写実的ではありません。それに長さの点でも中篇小説とは呼べても、ロマンであるとは言えません。

14世紀の後半になって、やっと最初のロマンが生まれました。三国志演義と水滸伝です。それで中国のロマンの開花期は日本よりもほぼ5世紀遅れていたことになります。朝鮮では16世紀末に現れた洪吉童伝(Hong Kiltong chŏn)が最初のロマンと考えられます。いくつかの超自然的要素をふくみ、長さの点から中篇小説と呼ぶ方が適当でしょう。1600年前後からロマンと呼べる作品が現れ始めました。壬辰録(Imjin nok)は朝鮮最初の歴史小説で、超自然的要素が含まれています。本当に写実的だったのは宮廷小説でした。その代表作品とみなされるのは、1795年から10年間の時代を描写している恨中録(Hanjung nok)です。これより百余年前に書かれた金万重(Kim Manjung)の九雲夢(Kuun mong)は朝鮮ロマン中の傑作だと私は思っています。仏教と道徳的色彩に蔽われていても、大部分は写実的です。

それはさておき、この国でもロマンの発達は日本より6世紀も後でした。ここで付け加えたいのは、中国でも朝鮮でも、ロマンを文学的に高く評価していなかった事実です。言い換えれば、ロマンを本当の文学として扱わなかったことは日本と対照的でした。

ベトナムにいわゆるロマンが出現したのは18世紀後半で、しかもそれは物語詩でした。最も有名なのは阮嶼(Nguyên Du')の金雲翹(Kim Vân Kiều)で、朝鮮の春香伝(Ch'unhyang chŏn)に多くの類似点が見られます。

ここで視線を西欧に向けますと、古代ギリシャやローマ時代の小説は、ロマンの基準に達していませんが、その長さから小説と呼ばれているのです。

ギリシャ小説の最古のものは、西暦前一世紀にパピルスに書かれた二つの断片です。古代王国アッシリアの古都ニネベの創設者ニノスの少年時代を扱っています。三世紀と四世紀にアキレス(Achilles)・タティウス(Tatius)、ヘリオドロス(Heliodorus)、ロングス(Longus)などの作家がいました。ロングスは田園詩小説ダフニスとクロエで

知られています。このラヴストーリーには本当の筋はありません。ロマンではなく日本流のロマンスです。ギリシャのいわゆるロマンの大半は一連の話が収められた作品です。ラテン語のロマン作家の中で最も著名なのは、西暦一世紀のペトロニウス(Petronius)・アルビター(Arbiter)と二世紀のルシウス(Lucius)・アピュレウス(Apuleus)で、後者のアシヌス(Asinus)・アウレウス(aureus)(金のろば)としても知られているメタモルフォシス(Metamorphoses)(変身譚)は、奇妙な冒険談の描写を集めた作品です。これらの作品をロマンとみなすには異議はあっても、私はこれらの作品の値打ちをけなすわけではありません。ルネサンス文学に多大の影響を及ぼし、シェークスピアやゲーテに高く評価されました。

ギリシャとローマで見るロマンへの発展の経過は、インドの散文文学が辿った道に似ています。七世紀の梵語で書かれた4つの作品名を挙げます。

ダンディン(Dandin)の10人の王子の英雄伝、ダシャクマーラチャリタ(Dasākumāracarita)。スバンドウ(Subandhu)のヴァーサヴァダッター(Vāsavadattā)。バーナ(バッタ)(Bāna[bhatta])のハルシャチャリタ(Harsacarita)(ハルシャヴァルダナ(Harsa-vardhana)王の英雄伝)とカーダムバリー(kādambarī)。ヴァーサヴァダッターとカーダムバリーは王女達の名前ですが、実はオトギ話小説です。インド文学専門家たちは上述の4つの作品はロマンではなく、詩的散文で、著者の関心はスタイルにあって筋にないのだと言っています。

私が今日アラビア文学やペルシャ文学に触れなかったのは、ロマンの概念についての話には必要なかったからです。

再び日本に戻りましょう。20巻からなる宇津保物語は落窪物語よりも古いというのが専門家の定見です。巻の一「俊蔭」はおとぎ話のようです。才に長けた清原俊蔭が副遣唐使として唐土に行くのは16才の時です。はしこくで嵐に遭遇し難破します。阿修羅、天使、仙人に出会い、仙人からすばらしい琴を貰って、神秘な音の弾き方を習い、39才で帰国しました。最初の部分ですでにはっきりと全章の性格が分ります。他の19巻は写実的ですが、「俊蔭」の巻により、純粋な意味で、宇津保物語はロマンと呼べないのではないでしょうか。

もちろん、落窪物語と古本住吉物語の成立年代の順序が問題として残りますが、日本古典文学大辞典（第三巻、563頁）は古本住吉物語についてこう記しています。「古本はおそらく落窪物語に先行し、その述作に影響したであろう」（友久武文）。しかしこれは推測の域を出ない考察でしかありません。

落窪物語の中に、「物忌の姫君物語」と「交野の少将物語」の題名が出てきます。後者は枕草子にも源氏物語にも現れます。残念なことに、この物語の内容が分らない現在、私がここまで述べてきた理由で、落窪物語こそ日本に残された最古のロマンと言えましょう。

私のこの定義に異論がないと仮定して、落窪物語はその構成と内容から考え、世界文学の中でユニックな位置を占めているという結論を出すことができます。言い換えれば、純粋な意味でのロマンを世界で最初に作り出したのは日本でした。